

理事を務めさせていただいております木村清隆（つくば市在住）でございます。2020年2月2日より7日まで、インドICとの共催コー・イニシアティブス・フォー・ビジネス（CIB）会議に参加して参りました。会議に参加をさせて頂くのは今回で三回目（2009年・2018年と今回）に成ります。

インド国パンチガーニ（ムンバイより車で約6時間）にあるICセンターで「持続可能な経済成長を遂げるために」等のテーマで、インドIC協会と隔年で共催しています。両国及び各国からの主要なビジネスの代表者及びその経営管理に携わるビジネスマンを中心に、企業の社会的責任を考えると共に、より公正で持続可能な社会を構築する上での一人ひとりの責任をより自覚していくための会議です。今回は25の国・地域から約50名が参加されました。日本からは矢野会長ご夫妻・石田様（CRT）をはじめ総勢8名で参加を致しました。会議では矢野会長からの健全経営に関する素晴らしいスピーチに続き、タタ・グループのCEOよりトラスト（信頼）が価値につながる。従業員との信頼の連鎖が大切であり、今やれる事がパーフェクトでなくとも継続することが信頼につながる。労働組合出身の小生には目からウロコの感動するスピーチ（会議）でした。会場でラジモハンガンジー氏と再会させて頂く機会にも恵まれ、人生観に勇気付けられました。

会議の合間で近隣に出掛けたとき、地元の爽やかな学生たちと出会い素敵なひとときと成りました。また、夕食後に

「文化の夕べ」の時間で各国からの参加者がそれぞれの文化を紹介する時間で、日本国では浴衣姿で小生が尺八を吹奏させていただき皆で合唱「君が代」「ふるさと」、そして「アメイジンググレイス」のときは各国の方々も合唱して頂きました。更に炭坑節を踊り各国からの参加者も一緒に踊られ楽しいひとときと成りました。

今回、日本を離れ素敵な出逢いと素晴らしい経験をさせて頂く事が出来まして、成長させて頂いた感がございます。これから尚一層精進し、IC(Initiatives of Change)に出会えたことに感謝し、私たち一人ひとりが（良）心の声を聴き、良い方向に変わり、家庭・職場・学校・地域社会・国、ひいては民族や国と国の間にも良い変化をもたらす活動の、小さな歯車の一人に成れるよう取り組んで参ります。これからも何卒よろしくお願い申し上げます。



矢野会長、ガンジーさんとともに



国際IC九州サークル勉強会 金生 郁子

1985年6月井原伸允先生は自身が主催する女性の自立を支え導く九十九会へ国際IC日本協会会長相馬雪香氏を招きました。氏は世界の状況に関心をもつようとMRAを紹介されました。その後、希望者はMRAに入会し小田原での会合に参加を続けました。

2005年井原先生は独自のIC活動をと、国際IC九州サークル勉強会を立ち上げ毎年3月の勉強会には日本協会会長のご講演をいただいてICの普及を実践してきました。

2009年ミニHOHOから傾聴の重要性、それでも一人ひとりがチェンジするには遠いとICの理念に基づいて様々な人物や歴史、国を探究し進めてくださいました。人類史上なくならない戦争、難しい日中韓の関係、女性が活躍するための信念や行動、生きていく上で受けている様々な恩恵への感謝、自分の時間や金銭の一部を公に使う勇氣、思い通りにならない人の背景を知るなどと積み重ねています。

井原先生にいただいた学びは私たちの物事の捉え方を変え、世界を知るときの物差しとなり、マスコミ報道を鵜呑みにしない。一つの物事を様々な視点をもって自分で考え仲

間と検討し合う。答は出ませんが、自分の生き方を問い、行動で表現しようとしています。徐々に自分が変わること繋がっています！

井原先生は一人ひとりが日々の中でICの理念を行動に表していくことを望んでいらっしゃいました。その表現は一人ひとり違ってみんないい！誰も評価してくれない中で黙々と実践してほしい！と。

2021年3月の国際IC九州サークル勉強会は「コロナと生きる」をテーマに米大統領選挙後の情勢、2024年より発行の新札の人物、日本と宗教、日本人の資質などの講演、発表です。「静かな時間」もプログラムしています。

矢野会長よりご講演「コロナ禍における国際IC活動（仮題）」をいただきます。

皆さんと一緒に意見を交換しましょう！



事務局からのお知らせ

皆様、明けましておめでとうございます。昨年12月の第70回理事会にて、今年の定時会員総会が3/14(日)10:30~12:30に開催されることが確定しました。コロナ感染防止のため、オンライン(ZOOM)形式となります。今後、会員の皆様には、関連情報を随時ご案内して参りますのでよろしくお願い申し上げます。

IC NEWS Vol.28 公益社団法人 国際IC日本協会 発行年月日 2021年1月7日 発行所 公益社団法人 国際IC日本協会 〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20 パレ・エテルナル206号 TEL:03-6273-1428 FAX:03-6273-1429 E-Mail:info@iofc.jp HP:http://iofc.jp <International lofC>HP:www.iofc.orc 頒価 1部 200円

原点に立とう 会長 矢野 弘典

明けましてお目出度うございます。皆さまには、お健やかにそして心新たに、令和3年のお正月を迎えられたことと存じます。

振り返って昨年は、得体の知れないコロナ・ウイルスとの戦いで暮れ、私たちの生活も公私にわたり大きく変わってきました。

経済や社会の活性化には、人の交流が盛んになることが条件ですが、国内の移動も国境を越えた移動も、依然として強い制約下にあります。有効なワクチンや治療薬が開発されない限り、自由な人の交流は戻ってこないだろうと残念ながら思います。

しかし、悪い状況がいつまでも続くものではありません。良い状態も同じで、私たちを取り巻く環境は常に変化して已まないものです。大事なことは時流に惑わされず、常に希望を失わず、変化しないもの、変化してはならないものを堅持することだと思えます。

そこで、本年は改めて「原点に立って考え行動する年」としようと考えますが、如何でしょうか。

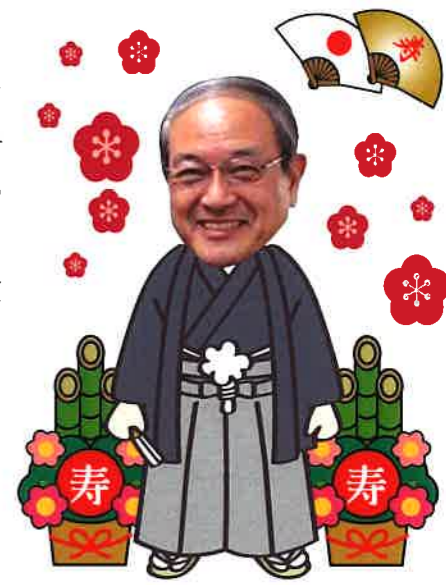
江戸時代の俳人松尾芭蕉は、「不易流行（ふえきりゅうこう）」という名言を残しました。「不易」とは簡単には易（かわ）らないもの、変えてはならないもの、いわば物事の原点を指し、一方で「流行」とは時に応じて易るもの、柔軟迅速に変わらねばならないものを指しています。芭蕉は俳句にこと寄せて語ったのですが、この言葉は仕事にも私生活にも応用できる見方です。

当協会に当てはめれば、「不易」はICの基本理念であり、活動の原点です。それは四つの道徳基準、変革の原理（周りを変えるには先ず自分が変わる事）や静かな時間などですが、自らを律し正す

所から始めようとブックマン博士は提唱したのです。静かな時間は忙しい日々の中で、本来の自己を確かめる貴重な機会であり、内なる声に耳を傾け、その声に従って勇気をもって行動すれば、道は拓けていくものと確信します。多くの人々の共感を呼ぶこともできるでしょう。行動の場は、家庭、職場、国内から国際社会へと広がります。行動は内向きに偏することなく、国内外のネットワークを活用し、できる範囲で外に向かうことが必要です。

一方、「流行」にあたる事業計画では変更の連続した1年で、日中韓学生フォーラムと学校訪問は、中止のやむなきに至りました。しかし、もう一つの主要行事である国際フォーラムは、Zoom方式で開催したところ、例年よりも遙かに多くの若者たちが海外から参加してくれました。この経験を通じ、テレビ会議は今後ますます活動の有力な手法となってくることを実感しています。

理事会は昨年、大隈理事の副会長就任、堀口理事の新任など体制を一新しました。今後とも心一つにして、社会の求めとご支援下さる多くの方々のご期待に応えたいと存じます。個人と企業の会員の皆さま、引き続きご協力をお願い申し上げます。



●国際に協会を取り巻く環境変化(リスクと機会)

グローバル化が進み、ヒト・モノ・カネの往来が激しくなって、新たな成長の機会が生まれたが、一方、「貧困国から豊かな国の経済格差拡大」と「移民受入拒否など」の問題が顕在化した。

国内では「テレワーク勤務やオンライン教育」の拡大、スーパーやコンビニにおける非接触の決済拡大(スマホやカード利用)、自動運転などのAI活用の浸透が進んだ。

「心のつながり」が希薄になって一人一人が孤独になってきた時代に、もう一度、当協会の存在価値を謙虚に見つめなおすことで、未来につながる新しい方向性を見出し、事業継続へとつなげていく。

●新型コロナ禍が当協会事業に与えた影響

(新しい日常への対応)

世界的大流行になり、海外渡航の制限、国内での県を越える移動自粛、ソーシャルディスタンスなどが継続されてきた。

これらの影響から、春開催の「学校訪問」、夏開催の「日中韓フォーラム」が中止となり、秋開催の「国際フォーラム」もオンライン開催となった。

影響は、令和3年度も継続すると考えられ、主な公的事業の運営で、発想の転換が求められている。

オンラインで行うことによるメリットを最大限に利用することが重要になってきた。

このような状況を踏まえて、次のことをご提案したい。

●「重点実践方針」を全会員が共通認識する

多様な民族・宗教・文化等を内包する地域の人々

の間で相互の理解と信頼を深め、世界の融和に資する。

日本人としてのアイデンティティの確立に努め、世界の中の日本人として自信と誇りと謙虚さを備えた人格形成に努める。

日々の生活の中に『静かな時間』をもち、4つの絶対道義標準『正直・純潔・無私・愛』に自らの行動を照らしながら、それぞれの場でリーダーシップを発揮する。

日本人が古来大切にしてきた自己省察(瞑想)、誠実な人柄形成、信頼の絆づくりを日々実践する。

●「中長期方針(5～10年後の姿)」の明確化と「公益事業マネジメントシステム」の構築

中長期方針(5～10年後)を決めて、全会員が共有して、各人が自律的に実践していく。

NPO 法人 3 原則:「やりたい人が手を挙げて、スタートする」「周りの人は、やりたい人の足を引っ張らない(批判しない)」「周りのやりたくない人の手を引っ張らない(責めない)」

各公益事業におけるKPI(重要パフォーマンス評価指標)を明確にして進捗状況を監視する

KPIの例: 会員満足度、新規会員加入数、新規参加者数、国内ゲスト・海外ゲスト参加数など、

「シニアの社会貢献(生きがい)の場」や「青少年の国際相互理解と友情を育む場」として、公益事業の更なる発展を目指す。



という「ひらめき」を頂き、国会での和解活動へと身を転じました。しかし、正直申し上げて、初心を全うできずに今日に至っていることを告白せねばなりません。「絶対無私」「絶対正直」という理念と、選挙で当選し、国会で予算や法律を通して結果を出すという、二律背反を克服できない歳月が経過しました。自らの不徳と力不足を痛感しながら、昨今の世界を見るにつけ、フランク・ブックマン博士が「武力による再武装ではなく、道徳と精神による再武装」と唱えた、第二次大戦前以上に世界が危険な状況にあるのではないかと、との危惧を抱いております。

それは、戦争が多くの命を奪い、大地を焦土と化すのに対し、現在は、他者を否定し、人と人とを分断し、戦争以上の格差と貧困を生む社会の蔓延で

内なる人は日々新たなり 理事 兼松 恵

謹賀新年

皆さま、新年をどのようにお迎えになられたでしょうか。2020年は人類の生き方にウイルスによる警告が発生し、世界の構図が一変する年となりました。コロナ感染で亡くなる方だけでなく、職を失い、ホームレス、自殺者数も急増し、弱者置き去りの日本社会の課題が一層浮き彫りになっています。

困窮に喘ぐ人々への支援が行き渡らない中、また人間の行動による環境破壊も進んでいます。私たちは未来の世代からも、安全で清潔な水・空気・郷土さえも、略奪しつつあるのではないのでしょうか？

誰もがかけがえのない存在として、その方そのかたならでの人生が輝くために、声なき声に想いを馳せ、支え合う社会を築く過程で、その障壁となっているのは何でしょうか。

新年を迎えることのできた私たち一人ひとりには、全ての命が尊重される社会の実現を目指し、希望に繋げる問題解決の糸口が託されています。

意識を研ぎ澄ましていないと、「えっ、ちょっと違うのでは?」と思っても、異を唱えず見過ごしてしまう間違いを犯してきた歴史の線上にあるのが、今日の日本です。

言論・思想弾圧は、香港・チベットに限らず、理不尽な権力行使によって、命を脅かされている人々がいる世界の現状で、いま何が起きているのか、おかしいことにはおかしいと、声を上げる選

す。加えて近年は、独裁型で好戦的な国の指導者が増えて、争いを煽っています。コロナウイルスは、こうした根本問題を浮き彫りにしました。人類と一緒にコロナ退治をすべきところを、それに反する指導者が少なくありません。戦争による以上の数の世界中の一般市民が傷つく可能性があります。

排外、分断、格差、貧困といった理不尽な世界に代わる、他者の受け入れ、融和、平等、共生の世界を市民が連帯して作ることが、世界を救う道ではないでしょうか？矢野弘典会長が指摘された「転機の兆し」をコロナが与えてくれたと感じています。果てしない闘いですが、折れない心で武装して進みたいと思っています。皆様のご指導をお願い申し上げます。

択と責務がいまを生きる私たちに問われています。

自分のできることを実践することが、自分の命、周りそして世界の人々の命をも救うことに繋がっていることを、私たちは多くの先人から学んでいます。

いつの世も社会を変えてきたのは、自らも間違いを懺悔し、より良い社会のために本気で行動をとった極少数の人々によって、歴史が刻まれてきた証しが示されています。

「静かな時間」は、心の奥深く内なる声に耳を傾ける時空であり、静かな時間を持つことで繋がります」と、昨年のフォーラムで、ジーンブラウン女史(英/豪州)がお話し下さいました。

チェンジに事欠かないわたくしであります。心の内なる声に聴き従い、自分の過ちを正す毎に、新鮮なエネルギーを得ています。多くの犠牲の上にある今日の日本です。日本が「人の心の痛みのわかる国」として、アジア・世界各国の人々との信頼の橋を築くために、わたくしも生かされている間、心して処する所存でございます。

皆さまお一人おひとりの尊い命に敬意と絶えざる感謝を込めて。京都にて。



理不尽な世界を変える転機 理事 藤田 幸久

私がMRAと出逢ったのは、大学卒業後 Song of Asia という MRA の国際親善使節に参加した時でした。アジア太平洋の青年約 50 人と 2 年間欧米 15 か国を、家庭にホームステイしながら歴訪したことが生涯の財産となりました。そこで学んだことは、①人は家族や身近な人々とケンカをする。それが、職場、地域、国同士の争いにまでも発展する。それを正すには自分を変えるしかない。②日本はアジア諸国からはアジアの仲間とは見られていない。ということでした。

それ以来、私は、アジア諸国との和解活動や、企業の労使関係や宗教間対立などの和解活動に取り

組みました。またその関連で、相馬雪香さんの「難民を助ける会」や貿易摩擦の解決に貢献する「コー円卓会議」の創設に関わり、各国の現場で活動しました。コーの世界大会に紛争解決の仲介の場を提供する「和解への課題」という会議も創設しました。

冷戦終結後、紛争や対立が増大する中、戦争を意思決定する政治や外交の場で和解活動を担うべき

